



## 九 商店街での決戦にて

---

「これで良かったでござるか」

ここは、地域情報誌「おおまち」の事務所。そこには、ざんばら髪の落武者コスプレと編集長の大町がいた。

「ええ。ありがとう。おかげで、ナイスストリートの信用は亡くなるし、雑誌の売り上げも落ちるはずよ。これで、うちの雑誌「おおまち」の売り上げはもっと伸びるはずよ。会社もつぶれなくてすむわ。本当にありがとう。商売敵の「ナイスストリート」が落武者を使って、婚活パーティーをやるって話を聞いた時は、「ナイスストリート」もやきが入って、つぶれるのは確実ね、って思ったけど、まさか、それがヒットするなんて意外よ。世の中って、何が起きるかわからないわね。何が起きるかわからないって言えば、あなたに出会ったことよ。相手が落武者でくるなら、こちらも落武者返しよ。でも、最初は、あなたは「ナイスストリー」の回し者と思っていたけど、そうじゃなくてよかったわ。本当にありがとう。明智小五郎さん」

編集長の大町は落武者の手を熱く握りしめた。

「明智じゃなくて、佐々木でござる。佐々木小五郎でござる」

「あら、ごめんなさい。佐々木さんね。それで、報酬はいくら欲しいの？」さっきの感動顔からビジネス顔に変化する大町。

「報酬？」佐々木の顔が石になったように固まる。

「お金よ。時間外の夜まで仕事をしてくれたから、残業手当も奮発するわ」表向きの笑顔を作る大町。

「お金はいらないでござる。宮本の邪魔ができれば、それでいいのでござる」佐々木の石の顔が豆腐の顔のように柔らかくなった。

「そう言わないで。最近、従業員を深夜まで、しかも、無給で働かせることが社会問題になっているの。うちの会社は、小さいながらもマスコミ、いや、ミニコミだから、社会問題も解決するよう、積極的に取り組む必要があるの。いくら明智さんが、いいえ、佐々木さんが自ら取り組んでくれたからと言っても、会社の規定に従って残業代ぐらいいは出すわ。そうしないと、うちの会社がブラック企業のレッテルを貼られて、世間から叩かれてしまうわ」目先のお金よりも将来のお金を心配する大町。

「いえ。結構でござる。お金は必要ないでござる。でも、社会問題を解決する会社が、同業者の邪魔をするのはいいのでござるか？」

再び石の顔に戻った佐々木が無表情のまま尋ねた。編集長の大町は、一瞬、ためらいをみせながらも

「邪魔じゃないのよ。生き残りをかけて戦っているのよ。戦国時代だって、大名たちが領土を争って、御隣同士、親戚同士、家族同士で戦ったじゃない。家来だって殿を倒して、自分が代わりに殿になったじゃない。それと同じよ。昔も今も、下剋上なのよ」と言い切った。だが、佐々木に「本当の事、御免」と心の中を切られたので、ちょっと胸が痛む。そんなことはどうでもいいことかのように、佐々木は

「それよりも、あいつ、というか、「ストリートタウン」の会社の場所を教えて欲しいでござる。宮本と直接、決着をつけたいでござる」

「そう。それならいいわ。これが「ストリートタウン」の会社の場所。ここから近いからすぐにわかるわ。これが地図よ。でも、くれぐれも、カップルを別れさせたのは、私からの依頼じゃないと言ってよ」

「もちろんでござる。拙者は、宮本の企みをつぶしたかっただけでござる。さよならでござる」佐々木は報酬どころか、目の前に出されたコーヒーにも口を付けずに、ミニコミ誌「おおまち」のビルから出て行った。

編集長の大町は、内心、お金を支払わなくてよかったと思いながらも、あの落武者コスプレの男がストリートタウンの婚活事業の妨害を「おおまち」に頼まれてやったとしゃべられないかと少し心配でもあった。

「もし、あの落武者がしゃべったとしても、私は知らないと言えはいんだ。あんな落武者のコスプレ男のことなんか、誰も信用なんかしないわ。そうよ」そう自分の頬をつねりながら強く言い聞かせた。

「どこに行くの？」

「わからないでござるが、このまま家の中で、じっとしてはられないでござる」宮本は歩いているが早足なので、坂本は小走り状態になる。

「とにかく、一度、うちの会社の方に行って、もう少し詳しい情報を聞こうよ」坂本は宮本を別の方向に誘う。

道行く人は、落武者の姿を見て、年配者は、触らぬ神に祟りなしと、一步、二歩と遠ざかり遠巻きに見ているが、女子高校生たちは「きゃあ。かわいい。落武者さんよ」とスマホで写真を撮ろうと近づいてくる。中には、ツーショットで写真を撮らせてくださいと頼んでくる女子高校生もいた。そんな女子高校生たちの要望に、宮本はピースをしたり、笑顔を作ったり、律義に応えている。

「向こうの落武者さんは愛相が悪いのに、こっちの落武者さんはサービス精神が旺盛よね」写真撮影の順番待ちの女子高校生たちがダベっている。その話を耳にして

「佐々木はどこにいるでござるか？」

「その落武者はどこにいるの？」

宮本と坂本が同時に声を発した。急な大声にびっくりした女子高校生たちは思わず、「あっちの商店街」と指を差す。

「いくでござる」宮本が指を差した方向に走り出した。

「ちょっと待ってよ。あたしの番なのに。写真撮影はどうなるの？」

女子高校生たちからはブーイングの嵐が巻き起こる。

「後から。後から。すぐに戻って来るから」坂本は彼女たちをなだめながらも、宮本の走って行く方向を確認する。

パンの匂いを嗅ぎ、眼鏡店を横目で見、スーパーの特売品に目移りし、喫茶店のコーヒーの匂いに思わず立ち止り、うどん店の看板でお腹がぐうと鳴る音に気付きながら、坂本は商店街の中

を走る宮本の後を追っ掛けた。

「佐々木」宮本が急に立ち止まった。商店街のアーケードの真ん中に宮本と同じような落武者がいた。そこは三町ドームといって、三つの商店街の合流地点で、休日には音楽やパフォーマンスなどのイベントが開催されている場所だ。

「宮本か。久しぶりだな。待っていたぞ」その声に振りかえった佐々木は背中から刀を抜いた。そう。佐々木との対面は久しぶりだった。

あれは、十年前か。いやもっと前だ。そう、かれこれ五十年になるだろうか。あの頃は、まだ、この国もまだ裕福ではなかったが、成長への期待からか、時代がワクワクしていた。偶然とも言うべきか、必然とも言うべきか、同じ年の、同じ場所の、同じ頃に、宮本と佐々木は石から人間に戻ったのだった。その時は、佐々木が街頭の電気屋のテレビで、外国人プロレスラーが日本人プロレスラーを殴る、蹴るなど暴行するのを見て、憤りを感じ、外国人プロレスラーを襲おうとしたのだ。その襲い方は、プロレスラーに生卵をぶつけ、排斥しようとしたのだった。これがかの有名な、歴史教科書にも名をとどめている「生卵事件」だ。

この行動を事前に知った宮本は、佐々木が今、まさに、リングに上がろうとする外国人プロレスラーに向かって生卵ぶつけようとした瞬間、自らの体に刺さる矢を抜き、その生卵に向かって矢を射たのだった。矢はわずかに的にはずれ、佐々木の右手の甲に当たった。佐々木は痛みで生卵を落としてしまう。生玉子は佐々木の手から滑り落ちると体育館のフロアーに落ちた。ぐしゃっと割れるかと思いきや、先端部分だけが割れ、見事、立った。これがかの有名な、ことわざ辞典に掲載されている「転ばぬ先の生卵」だった。現実は、時にして、人間の予想、想像以上の出来事を引き起こす。だがそれは、所詮、人間の想像力が現実と比較して貧困なことを証明しているだけのことであるが。

「あっ」坂本は思わず声を上げた。だが、何もできない。動くことさえできない。ただ、二人がどうするのか見ているだけだ。見ているだけで、人生はあっという間に終わるものなのだ。佐々木の刀は長い。宮本は刀を持っていない。

「宮本。刀はどうした」佐々木の顔は憤怒で真っ赤だ。

「お主とは戦わないでござる」冷静沈着の白い顔の宮本。

「勝ち逃げか。それとも、拙者に恐れをなしたでござるか。この前は、お主に邪魔をされたが、今回は、そうはいかないぞ。刀を持て。宮本。決着を付けるぞ」

「もう、戦いは終わりにするでござる」

「お主が終わりでも、こちらは始まりだ。やあ」

佐々木は相手が刀を持っていないにも関わらず斬りかかった。それを右に避ける宮本。その右に再び刀を振り落とす佐々木。それを交わし、左に飛ぶ宮本。それが何回も繰り返された。次第に、佐々木の刀の刃が宮本の着物までに触れるぐらいに近づいて来た。このままでは、宮本さんが危ない。坂本は周りを見渡す。ここは商店街。刀になりそうなものはない。あった。それは、店の宣伝をしているのぼり旗だ。これでも何とかなるだろう。

「宮本さん。これをどうぞ」

坂本はのぼり旗を宮本に投げる。宮本がしっかりと掴む。

「ようやく戦う気になったか」佐々木が正眼に構えた。

「これほど言ってもわからないのであれば仕方がない。頭を冷やしてもらおう」宮本ものぼり旗を正眼に構える。

刀とのぼり旗。素手よりはましと言え、まともに立ち合えば、宮本は佐々木に負けてしまうだろう。そうなると、歴史はひっくり返るのだろうか。いや、この戦いは宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘ではない。彼らの従兄同士の、宮本七蔵と佐々木小五郎の決闘なのだ。

宮本と佐々木の間合いは、約五メートル。お互いに睨みあったままだ。微動だにしない。坂本の手汗がにじむ。外野だけが興奮している。決闘する当事者は冷静そのものだ。やがて二人はじりじりと足を前に滑らせ、近づいていく。四メートル、三メートル、二・五メートル。二人の間合いが詰まっていく。その間にも、三町ドームにはお客さんがテレビの時代劇のロケかと思い、二人を二重にも三重にも取り囲んだ。クライマックスの瞬間は間もなくか。

佐々木が足を一步踏み出した。佐々木の長刀を今振り下ろせば、宮本の顔面を切り裂く距離だ。「やあ」佐々木の雄叫びが上がる。その瞬間、宮本は飛び上がった。佐々木の刀は空を切った。宮本は空中でのぼり旗を振り下ろした。その時、短くされていたのぼりの棒が伸び、佐々木の頭に向かう。

宮本が地面に着止した。頭に結んでいたはち巻きが二つに切れ、額にうっすらと血がにじむ。佐々木の顔が笑った。勝利を確信した笑顔だ。だが、その頭ががくんと後ろに項垂れた。三町ドームの天井をうつろな目で見上げる佐々木。

「また、同じ結果か。歴史は繰り返すのか。今度こそは、今度こそは・・・」佐々木はそう呟くと背中から地面に大の字に倒れた。倒れた場所からすぐに煙が噴き出た。佐々木の体が煙に隠れる。一陣の風が商店街に吹き抜けた。煙も風と共に去っていく。煙が消えた後には、佐々木の姿は忽然と消えていた。ただ、小さな石が三つ転がっているだけだった。

「すごいぞ」

「江戸時代にタイムスリップしたみたいだ」

「それに、相手が消えたぞ」

「そして、石になったんだ」

「殺陣とイリュージョンの合体だ」

「こんなの見たことない」

街に来たお客さんは思ってもいなかった無料のイベントに大喜びだ。拍手が鳴り止まない。おひねりを石の前に置く人もいる。そんな観衆を無視して、宮本は石になった佐々木を掴むと懐に入れた。

「なんだ。もう終わりなのか」

「もう一回やってよ」

「どうやったの？ネタを教えてよ」

「サイン会はないの？」

「いつテレビで放送されるのか教えてよ」

お客さんたちが口々に叫ぶ。そのうちに、「石を戻せ」「医師を呼べ」「石に意思はあるのか」「石の遺志を継げ」「縊死したわけじゃないだろう」との声が合唱となって、ドームに鳴り

響く。これがかの有名な、年末にこぞって歌われる「監禁の歌」だ。

だが、そんな歌声を無視して、宮本は「坂本殿。さあ、行くでござる」とドームから足早に立ち去る。その後姿を坂本が走って追い掛けた。